



「七夕飾り」と「おじいちゃんの絵」と

園長 笛木 哲



年少さんの教室で見つけた二つのこと。■7月。七夕飾りとして、三角の折り紙をずらして重ね合わせる「三角つづり」(①)を作りました。○君は、三角をずらさず重ねて貼り合わせ、家の形を作りました(②)。担任のねらいとは違う形でしたが、

笹に飾ると「こんなお家に住みたい」という彼の思いが聞こえてくるようでした。■9月。持ち帰った「祖父の絵」に眼鏡が描いてあるのでお母さんが、「◎君の大好きなおじいちゃんは眼鏡をかけてないよ」と言うと、「これはおじいちゃんだけど、ぼくのおじいちゃんじゃない」と答えました。◎君が

描いた絵は、担任が子どもたちに祖父母を想起させるために提示した「おじいちゃんの見本の絵」のおじいちゃんでした。彼は、担任が示した絵を見て「見本の絵のようにおじいさんの絵を描く」ことが大事と思ったのでしょう。

絵の展覧会の審査員をした時のこと。私が「技術がしっかりしていて素晴らしい」と賞賛した絵を、審査委員長の先生が「形は捉えて描いてはいるけれど表現を楽しんでいるのかな」と一言。その言葉を学校に持ち帰り職員に話すと、絵の上手な先生が「絵を描いて見せたことで、子どもの自分らしい表現を台無しにしてしまったことがあります」。ある先生は「時間を気にせず、子どもが描きたくなるまで鏡とにらめっこさせたら、味のある表情の自画像が描けました」とそれぞれの体験を語ってくれました。

年少の子は、頭で思い描いても整った線で表現する力はまだ育っていません。そんな子に、どうやって描くのかという技術ばかりに重点を置いて指導すると、大人目から見える形の世界に子どもたちの思いを当てはめる絵になってしまいます。大切にしたいのは、大人が考える形の整えられた絵ではなく、子どもの時期にだけ見える世界をそのまま描いた絵です。だから、できあがった絵を大人の感性によって「上手い」「下手」と評価するのは子どもの未来に害を与えるだけです。子どもの絵を見て、全てを受け止めることができれば、きっと絵から「子どもの声」が聞こえてきます。そして、子どもが書いた物語を読んでいるかのような気持ちになるはずですよ。

子どもが絵を描くということは、言葉を話すことと一緒に、自分の思いを表現するための一つの手段です。私たちは子どもの描いた絵を見ながら、子どもの思いを感じ取り、言葉によって翻訳して子どもにお返しするのがいいのだと思います。

※教えることがダメと言うことではありません。教えることでぐんぐん表現できるようになる時期や場面があります。

新しいお友だち

10月からちゅうりっぷ組に鈴木さやさんと平井りとくんの二名が仲間入りしました。ちゅうりっぷ組は10名になりました。とねがわ幼稚園の園児数は、172名になりました。これまでのお友達と同じように、二人も大切に育てていきます。



保護者の皆様から信頼される 安心安全の幼稚園をめざして

9月6日の残暑厳しい中、まだ始まったばかりの人生を謳歌している3歳の園児をバスから降ろし忘れ、何時間も閉じ込め、熱射病で死亡させると言う痛ましい事故が起きました。耐えがたい熱さのバスの中で、水筒の中身を飲み干し、上着を脱いで必死に生きようとした女兒の気持ち、朝のバス停で当たり前笑顔と共に帰ってくると信じて送り出した娘と永遠に別れねばならなくなった親御さんの気持ちを想像するだけで、胸が締め付けられます。そして、私たちの園にお子さんをお預けになる保護者の皆様の中にも、この事件に接し、「とねがわ幼稚園はだいじょうぶかしら」と不安がよぎった方もいらっしゃるかと想像します。私たちは、これまでなかったからこれからはないだろうと楽観的になることを戒め、今回の事故を他人事ではなく我がこととして受け止めました。これまで行ってきた一つ一つの手続きや対策をもう一度明確にし、保護者の皆様の信頼にお応えできるよう全職員で日常業務を再点検したことをご報告いたします。

運動会ではたくさんのご声援をありがとうございました

年少の頃、教師の言葉が届かず、ピアノの上に乗って、保育中でも教室の中を走り回り、教室から飛び出してしまうことがありました。その子が、年長さんになりました。運動会予行、全員リレーでのことです。バトンを渡すことで精一杯な子どもたちの中、その子は、次に走る子に「がんばって」と一言添えてバトンを手渡しました。職員の一人がその言葉を聞き漏らさず、その子の3年間の成長の姿と共に、目に涙をためて伝えてくれました。



運動会のような集団が一斉に活動する場では、我が子と他の子を比べてしまいがちです。「他の子ができているのに…」「友だちと違ったことをしている（恥ずかしい）」と。でも、その子は教えてくれます。「今の私を見て。これでも私は一生懸命にがんばっているの。今はお父さん、お母さんの期待に応えていないかもしれないけれど、お父さん、お母さんの子だもの、いつかきっと輝くよ。だから今は待つ。私は私」と。

手前味噌になりますが、集団生活の中で、その子の良さを認め伸ばし、主体性を育むとねがわ幼稚園の教育活動が、こんな素敵な言葉を伝える子を育てたのだと思います。この子だけでなく、ここでは伝えきれないたくさんの成長がありました。運動会という経験が、子どもの心を鍛え、友だちとの関係を深く強くしました。これもこれも、保護者の皆様がお子さんを愛情深く育ててくださっているからです。夢中でビデオで撮影し、カメラのシャッターを切る皆さんの姿は、「愛」そのものでした。

